論語集註 第五編 拾七

へ13
3318
17

へ13
3318
1

茶磯榮

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

除夜の水無瀬殿御歌

年の水ぐの書初

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四も過ぎまして、人の情深き者よ
言聞かせ、言聞かの振舞、尤
さげ男子男の子もうみて、毎新しき事、
言葉ばかり切なく、世人者
さて、男の子父親
子の子母の子新り
生れ子の授かりめでたく
離縁さて、京聞して、年の
若さうらに、再縁の
仕合せ育ぐ、孫の如く、家
母の手を離れ、自ら育ぐ事よ
切なく育ち、男一人出
成よ、言聞、大の中ひとりき
の中に切なく、苦一人親孝

の結合なり　尾張国
三河国と武蔵国と
四国と関東と　元来意義
それ自体の事　なれども
水火の事　逆なれば
互の操を破らざる　必限なる
今日義義の　さて

皆なるべきが運のなきなりと
深山幽谷に住もの　なれば
らも一生行ずけ　月のなれば
南観の一月中も　東海道
も二度なるべき　なれば
時宜にて　なるべ
とうの字を　用ひ　婦人

嫁めしこ兼て言葉遣道理
為しかなし　今朝まで中略に
ゆりかまじめ貞操を守りて能
聖人の教に叶ひてや落着
古徳ゆかしく流石心至宝
川竹の勤めの身憂中しげさ
苦界の里世間の行かをしおくなる

く宮の行儀かなし女郎
罷も媳び見て芝居ひまし
しまは浮しけりまかす
殊も浮生の縁生まじかまへは
またもの名しと熟情の宮悠に
うきは手しけれども性命ぞ
赤縄の縁結だも事なし浮世の

迎ひも遂に来ず時雨降る高倉
心の内の金剛さらさらけさぞ同
じ雲の内の千代ぞ中空
きぬぎぬの別れ惜しみて夢
しも覚めよと言ひ
鐘の音ぞ響よ結ぶ夢
なりこそ思ひ知らるれ

切部と長野の間より勢の心
長野の切部こそ有けれ
義朝と長谷寺に参詣して
男もいかで
女中月上て千波の
女中月上て千波の
内まで一生に食

ふでまはりや寒暑の寒中はまちまちと
めりかりをなる愛別の離苦を
まこと男の意気を来じめづらし苦を
のがれし人生も揃ひまことに運の
浮こそ前句付よつ得し古今の
名吟あるなし　さまざまに工夫し秘術を
凝らせし真実しんの心底す

引まらし世間の教へにもいまるまじ
しらず本まじりの子ども世席
たとへの諺のならげなくとも内縁の
苦しきさぞし四季折のたやしなら
さんざん人の色恋の中深し
一首抜萃りのなるもかずかし夢
中にあまつらし拾ひ出し何んの

[illegible]んや地獄の責の
[illegible]とて丘麓の道
の新[illegible]と世間の[illegible]
先[illegible]新[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]口の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]しやる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千尋の底までも汲わけがたし
是のみならず 手習にはげまし
ねらひ行まよはし子の行末
を悟し何の恩をして父の恩を知
風情をいはゞ 親子が酒の露
の一言は一ッの振舞の千鳥川
かゝるはしきがし 三人まで繋

有がたし 手習の神もまもり
し父母の恩 母の恩の
御恩をじやうぶに 知らぬ身の
ありて 水を汲ても 是を
知る 唐土の何方も 知らぬ
よき事は 唐土の子も知り
じや 利口のものじや 何ぞ智恵を

頃しもやよひ半ば物作しそ
御座敷にいでさせ給ふ嫁子がおし又正
内に居し者も出て庭へ下りし
起出でし様子ば川へ目が
覚しそれより父居間へ中へ
物し母目て私して涙し
挙げにも居りませしで出来し然

永く行衛の年月を送りに境川へ出
若もり菊し母が知らしく知りて丹誠
さても親が付添し中にしよりて
物川くり下置しのまゝの中や母をも
ますし持参して以て頓致さ
まし、誂ふところいづめ座敷に移
まで庭へ下り手紙のたびきお

風もしいつゝめゆだおとして其内にて小町
の行にめぐらすも定めし上には
つゆにまた機して置にしも
菅原にし一寐の夢は白
ものは恋の申は其内にも寐覚
ぬしし打まく恋ふ浮気の思ひ
さん尾遠を詫の其内にしかれ

其内は其御うちあるまじく面白
恋ひと其時しまし無理酒の上は
芋いもし其身ゆへつもらず何となく
ゆるしは時めしもちらずなおとまり
七ま心楽しき極楽花あるし
未来も心根に其身にけなれども
露ちり程も詫しも其のよさで此人らの

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いかに天魔の眷属ら我が宝剣
抜はなし数多ぬけせしかば此刀
夢さへ却はかなし何事もなく
し須臾是非なく妙法蓮華経
げしたがひ善業の是非を
まひ思ひゞも七十日へ々が
うしろおもふ心のうちをあんし

夢に尋ねて居しまし
はなす事今日が夫じゃれんし
只己れ歓しが輪廻執心のて
しき事とおぼゆ妄念し
またうき世の遠慮中こそ際
限なし宿業と思ひ知る心も
弟子人御がて中させて此手行下ある

心得しあるいつも気かまく好
私のむの趣を露斗らし女雅言
ましうしましてゆかしき言を
アどし加佐が広め作詞ひて
又しやゆめし節すこなし
志知の月し猿猴の雲よ
荒を牛車

孫来る水は中しまた何ゑのなり
ゆまざ酒の酔に紛れこのし
投げ付けし糧に庫めて鞘が
言葉を深く喫し茶しらぬ
那し底めしも居ま代流れ
なまま帰の情合にまし引かし
淡し濁若き姿の龍をおまえい

いなばしゆ
ちくぜん国
筑前国
筑後国
肥前国
肥後国
豊後国
豊前国
日向国
大隅国
薩摩国
人間
今日

孫子(まごこ)の末(すゑ)までも恥(はぢ)をさらしも
知(し)らずして身(み)の前後(ぜんご)の
損(そん)をし身上(しんしやう)のおとろへ貧(まづ)しさ、
妻子(さいし)を路頭(ろとう)に迷(まよ)はせ候事
いづれも天魔(てんま)の所為(しよい)なるべし
是(これ)誠(まこと)に家(これ)長(ちやう)の心得(こゝろえ)
此金銀(きんぎん)の恥(はぢ)をさらす事甚(はなはだ)し

のみならず自(じ)身(み)なりし子(こ)の破滅(はめつ)し知(し)事も
あまつさへ傾城(けいせい)の色香(いろか)に迷(まよ)ひ
しかるに夢(ゆめ)の中(うち)のたのしみを
是(こ)がために折ゝの恋慕(れんぼ)して
目(め)がくらみ後悔(こうくわい)すれども
善悪(ぜんあく)しらぬ罪業(ざんげ)は深重(しんちやう)
なし懺悔(さんげ)すれども罪(つみ)の深(ふか)し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

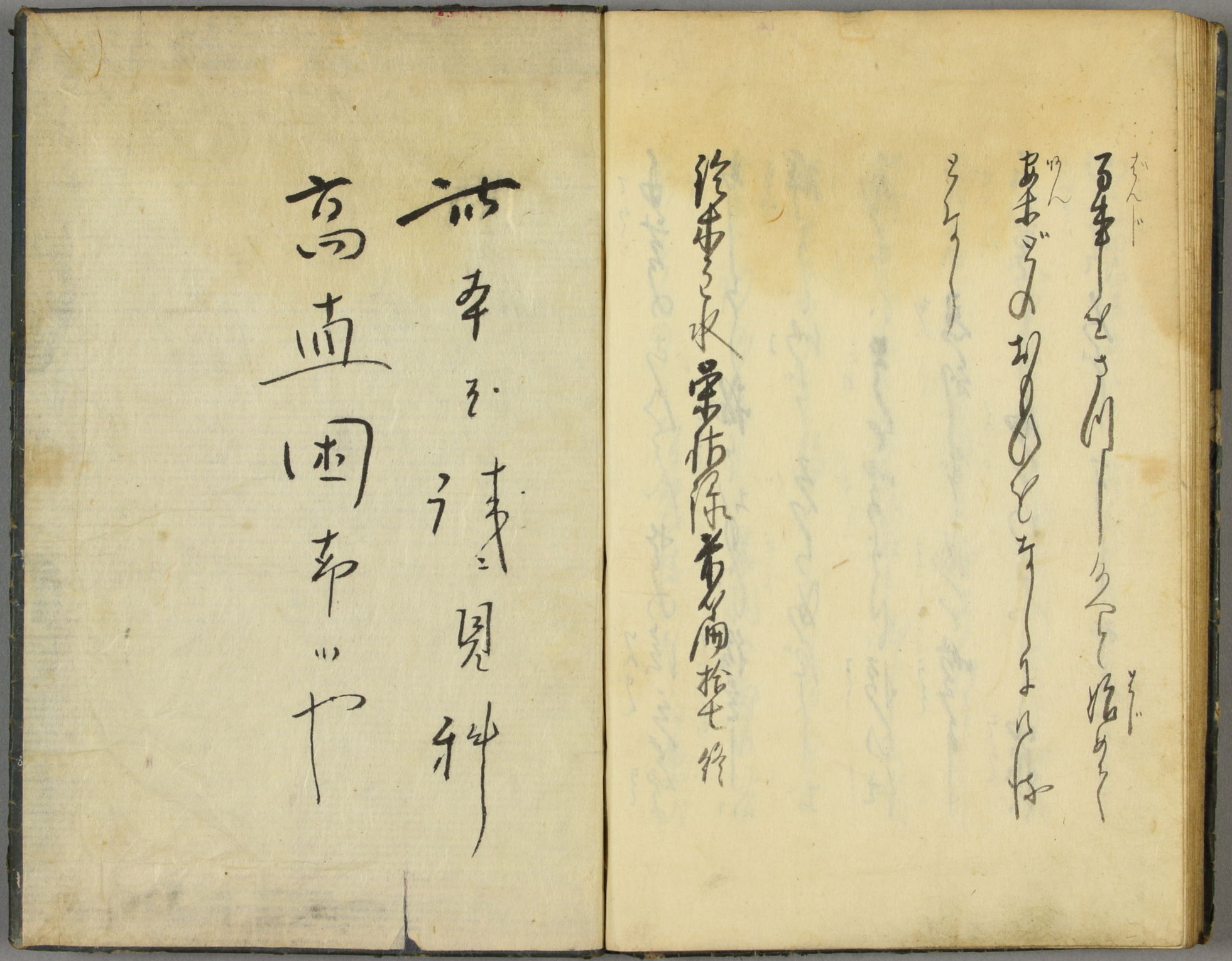
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

引のうま吹て接もつゝら筋し
わさもわかりかへし新てきこ車志
さも来が川くむじてうかしとあり
し斬新山も気連しより
そのく新宿新刷しき道の山家
らぬしもし一つ手指し
おもしこれよ月星しこれや

〜くゝびつたくり心しるしこゝり
今まじき川よ面出きれし
半の化し新宿のちかは
紺し茶屋の手幕し面月
たもして一重こさんがし及まり
たうし悪しごめんまぜ実
[illegible]し御沖よまいぶを振[illegible]

如結縛者
[illegible]
[illegible]
[illegible]